

## アピモンディア近況報告

渡辺 英男

アピモンディア (APIMONDIA ミツバチの世界) は、国際養蜂協会連合の呼称で、1897年に創立された、養蜂に関わる人たちの世界組織 (NGO 非政府組織) で、現在、49 か国の約 5 百万の会員を有する。本部 (事務局) をローマ (イタリア) に置き、世界の養蜂の発展を促すために、各国あるいは国際組織 (WHO 世界保健機構、UNEP 国連環境計画、FAO 食糧農業機構など) と連携して、広範囲に活動している。

また、ブカレスト (ルーマニア) に国際養蜂技術経済研究所 (I.I.T.E.A.) と印刷局 (季刊誌 *Apiacta* の発行や会議録の印刷など、今後国際会議の主な論文は *Apiacta* に掲載される)、ドル (チェコ) にプレスセンターを持つ一方、7 つの常任委員会 (養蜂経済、技術、病理、生物、花粉交配・蜜源、発展途上国開発、アピセラピー) を置き (事務局は各委員長の居住地)、それぞれ連携しながら活動している。

理事は 12 名で、うち 7 名は上記の常任委員会を担当し、全員ボランティアである。理事会は年に 1~2 回開かれるが、常時はインターネットで打ち合わせている。

### 国際養蜂会議は最大のイベント

アピモンディアは、2 年に 1 度、総会を兼ねて、国際養蜂会議を会員の国で開いている。第 30 回大会 (1985 年) が名古屋で開かれたので、日本の養蜂関係者には馴染みが深い。あれから、ワルシャワ (ポーランド)、リオデジャネイロ (ブラジル)、ザグレブ (クロアチア、戦争で中止)、北京 (中国)、ローザンヌ (スイス)、アントワープ (ベルギー)、バンクーバー (カナダ) と渡り、昨年はダーバン (南アフリカ) で開催された。



国際養蜂会議が開催されたダーバン市

来年はユプリナーヤ (スロベニア)、2005 年はダブリン (アイルランド) で開催予定である。

この会は、本来は総会であるが、世界の養蜂関係者の親睦・情報交換・ディスカッションを活性化するため、約 1 週間の日程で、各常任委員会の発表 (本会議、シンポジウム、ポスター、ワークショップ)、歓迎とサヨナラのパーティー、養蜂家訪問旅行などがプログラムに組み込まれる。また、APIEXPO (養蜂博覧会) が併催され、情報収集には最高の場所である。

### アフリカ初のダーバン大会

第 37 回大会は、2001 年 10 月 28 日~11 月 1 日、ダーバンの国際会議センターで開催された。この会議は、準備途中で、国連の人権会議に会場を譲ることになり、予定 (9 月) を変更した上に、その後に発生したテロ事件の影響で、登録者のキャンセルが相次ぎ、参加者は約 1100 名で、通常 (2000~5000 名) をはるかに下回った。また、日程と予算の都合で養蜂家訪問旅行がなく、APIEXPO への出展も少なかったため参加者に物足りなさを感じさせた。

しかし、この大会には見るべき収穫もいくつかあった。アフリカ大陸は、蜜源に恵まれているが養蜂は遅れている。一方、食糧不足や病気で悩んでいるので、養蜂を普及して豊かな自然の恵みを活用するきっかけを作ろうと、この大陸初の国際養蜂会議を開催したのだが、この目的は達成されたと思う。

目新しいこととして、専業養蜂家の世界規模の減少を食い止めるため、養蜂経済の会議の中で、世界の主な輸出国 (中国、オーストラリア、

アルゼンチン、アメリカ、ヨーロッパ、南アフリカ）からの代表者による、養蜂経済・貿易・疾病・環境問題などについての発表が挙げられる。早速、代表者たちの国を軸に、世界專業養蜂家連盟を造ることにし、当面、養蜂経済常任委員会の中で活動してもらうことになった。また、遺伝子組替え作物の毒性や抗生物質の残留問題についても、今大会で討議されたが、特に、後者は、自分たちに責任があるので深刻である。ハチミツは継続して消費されるので、抗生物質が効かなければ、疑いの対称にされ、健康食品であるだけに、騒ぎも大きくなる。この問題については、ミツバチ病理常任委員会を中心に、今年10月10日から3日間、チェレ（ドイツ）で、シンポジウム“Prevention of Residues in Honey”を開く予定である。世界各国から、養蜂家・加工業者・貿易業者・獣医・科学者・行政など約300名が参加し、残留の現況・代替法による残留予防・抗生物質の投与方法による予防・残留分析法などが討議される。日本からも是非参加して、日本としての対策を講じて欲しい。今騒がれている狂牛病よりも大きな問題になると思われるからである。

なお、ダーバン大会では、インターネットが準備段階から駆使され、プログラムやアブストラクト冊子も連動していたこと、4か国語（英、仏、独、羅）で行われた各本会議の発表のほとんどが英語であったことも特筆される。

### 『エコ・エコノミー』と『アピ・ミニマム』をキーワードに

現在の経済システムには、資源と自然環境の価値が導入されていない。すなわち、資源はただ同然で採取され、その消費後の排出物は自然環境を汚染しても修復費を支払うことはない。この延長線上には、ミツバチも人間もいない。資源と環境の価値を経済にインプットするエコ・エコノミー“Ecological Economy”は、養蜂存続の不可欠条件である。この当たり前のことが行われれば、外部経済に寄与している養蜂業は優位となる。

次に、ミツバチの人類への貢献を考えると、

地上のあらゆる所で、最小限のミツバチ（アピ・ミニマム“Api-minimum”）を飼い、自然の恵みを得るとともに、食糧の増産並びに自然環境の改善を意図的に行う必要がある。しかし、現実には、極端に安いミツバチ生産物の輸入等によって、ミツバチの空洞化が世界規模で進んでいる。輸入を規制し、優遇措置（ミツバチの社会的貢献に対して）を講じて、世界全域にミツバチが飛び交う風景を作る努力をしなければならない。これらのキーワードを世界に広めるため、ダーバン大会で、アピ・ミニマムを目標の1つとして採択した。

### 国境を越えて

ご承知の通り、養蜂を取巻く環境は年々悪化している。地球規模で緑が減少し、汚染が進み、異常気象による被害が続出している。そして、このような自然環境の悪化は蜂病を増やし、生産物の薬物汚染を広げている。また、先進諸国では、他産業との収入格差が広がる一方で、極端に安いミツバチ生産物が輸入されて、ミツバチと養蜂家は減少している。このような問題を改善するためには、国境を越えた交流・討議・協力が必要であるが、幸いなことに、インターネットの急速な発達と、アメリカ一強による英語の国際語化によって、コミュニケーションは容易になり、追い風になっている。アピモンディアは、世界のより多くの養蜂関係者に参加していただくために、ダーバンの総会で定款を改め、アピモンディアに参加していない国の人たちでも参加できるようにした。ミツバチに地境がないように、アピモンディアにも国境はない。

昨年のダーバン大会で、私は8年間勤めたアピモンディアの理事を退任させていただき、業務を後任のデン・クイット・タムさん（ベトナム）に引き継いだ。彼は、立派な見識と実績のある方なので、ミツバチの飛び交う世界を残すために尽力してくれるものと期待している。紙面をお借りして、私に頂いたご支援に感謝申し上げます。タムさんとアピモンディアに変わらぬご支援を賜わるようお願いしたい。

(〒158-0082 世田谷区等々力7-23-11)